

『或る女』の時間論

荒木優太

序論、『ある女のグリンプス』と『或る女』

「人はとつぜん過去の貌をして現れた謎にとらえられ、わずかな偶然の符合や類似を手がかりに、広大な意味の世界にさまよいこんで行く。〔中略〕人は、もしあのとき、という過去の可能性を想像しながら、生きそびれたもう一つの生、もう一つの自己を現在の限られた生の埋め草のようにつなぎ合わせ、けっして見ることのできない生の全体像を垣間見たような錯覚を起す。あるいはそれはわたしたちが達しうる最大の幸福なのかもしれない」(冥王まさ子『ある女のグリンプス』序章)

このような言葉から生を内省し過去を辿り自分のもう一つの可能性を探求的に表現しようとする冥王まさ子の処女小説『ある女のグリンプス』(昭五四・一二)は始まっていく。主人公由岐子は二年前留学中に住んでいたアメリカのニューヘイヴンへ訪れる。切っ掛けは同窓会が開かれるという理由であったが、その一方彼女は「ニューヘイヴン物語」という小説を書くつもりで、膨大なノートをとっており、その旅行が実際に小説を書くチャンスにもなるのではと考えたのだ。嘗て大学教員の仕事をやめ、夫龍男の仕事の補助の為アメリカへ訪れた由岐子はニューヘイヴンでドロレスという女性とその恋人である大学教授レナードに出会っていた。ニューヘイヴンで両者に再び出会う由岐子。その再会は由岐子にドロレスとレナードの関係を辿らせ、レナードに愛情を覚えていた由岐子はドロレスに嫉妬しながらもその存在に強く惹かれていたことを思い出し、自分の生を内省する。そうしてドロレスという存在は自分の別の可能性だったのだと悟り、ドロレスと自分の観点を交換しながらレナードという男を描いてみようと思い、「ニューヘイヴン物語」を最終に書こうと決心する。しかし、ひょんなことからノートと小説の資料が入っていた旅行鞆が盗まれてしまい、その試みは頓挫する。

この小説の題名『ある女のグリンプス』は、有島武郎が明治四十四年一月から大正二年三月迄『白樺』(全十六回)で連載していた『或る女のグリンプス』からとられている。そうしてそれから六年後このプレテクストが改稿され、更に後編が書き加えられ、有島武郎は自身の最高傑作といってもいい著名な長編小説『或る女』(大八・六)を書き切ったのだった。何故冥王まさ子が、有島のテクストを自身の処女作のタイトルに転用したのかを洞察することはできない。だがしかし例えば、『或る女』は、自由であることを何よりも希求する主人公の葉子が、その自由を男を愛することを通してのみ求めたために破滅していく物語であり、冥王まさ子の『ある女のグリンプス』にもそのテーマは生きていゝる(水田宗子「解説」/『ある女のグリンプス』講談社学術文庫版、平一・九)と指摘することは可能だろう。

そしてこのような指摘は、翻って『或る女』というテクストの読解の可能性を切り拓いてはいないだろうか。詳しくはで詳しく述べるが、『或る女』後編の葉子も由岐子と同じように、ああいう風に生きられたかもしれないと可能だったかもしれない己の生を夢想し、後悔する。しかし、このような夢想は果たして葉子の犯した様々な失敗に由来するものなのだろうか。逆に問えば、葉子は失敗を犯すことがなければ夢想を抱くことがなかったのだろうか。寧ろ、時間の中で生きるという人間の条件の中では、このようなありえたかもしれない世界への夢想は不可避免的に抱いてしまうものなのではないだろうかと思われる。この時重要になってくることは、夢想の発生の根源にあるものは、人間は取り返しえない、そしてそれ故に替え難い過去を常にもってしまふという事実である。もし過去が何度でもやり直せるのだとしたら、人は不可能な夢想を抱くことはないだろう。しかしこのようなことは事実と反し、人は不可能ながらも「ああなったらよかった」「こうすればよかった」という「たら」「れば」というルサンチマンを吐いてしまう。ここに実存主義的な生の不条理が構成される。『ある女のグリンプス』はこのような読解の可能性が『或る女』に眠っていることを示唆しているように思われる。そして本稿はその可能性をテクスト細部に於いて読み逃がすことなく探求していくものである。

本稿は『ある女のグリンプス』の示唆に端を発しながら、『或る女』に於ける時間、特に葉子の過去についての感覚を考察するものである。、では議論を精緻にする為、過去そのものではなく、過去を指示する現前（痕跡）と葉子のコミュニケーションの志向性の関係について述べ、はより抽象的な過去存在が葉子にどのような行動規範を押し付け、そして彼女がどのようにそれに反抗し、又妥協したのかを考察した。そして最終的に、『或る女』という小説は事前の承諾もなく世界のうちに投げ込まれた実存者が不可避免的に直面する後悔や苦悩を描いた小説であるという結論に達した。

凡例。一、雑誌や新聞の機関誌名、小説、長編評論の表題は『』で括り、その他の評論、感想文等は「」で括っている。尚、引用文も全て「」で括っている。二、引用文中の旧漢字は原則として新漢字に改めた。三、引用文中にある〔 〕は引用者による註や補記である。四、有島武郎の言説の引用は全て『有島武郎全集』（筑摩書房、昭五五・八～昭六三・六）に依った。

一、読む女

本稿の課題は葉子に於ける時間の問題を考察することにあるが、先行研究に於いてこの問題は時折触れられる。特に参考になるのが、石丸晶子（註一）、内田満（註二）、田辺健二（註三）等の研究である。

石丸晶子は『或る女』の中で有島が「峠」という単語を複数回使用している点に着目しながら、「峠」は二つの世界を隔てる境界記号として機能していると指摘する。二つの世界とは石丸の言葉を使えば「時間の世界」と「時間なき世界」であり、葉子は前者から後者へと「変身」するヒロインである。特にそれが露わになるのが、第十六章からそれ以後であり、その章では葉子が婚約者木村を捨てて絵島丸の事務長倉地の愛へ踏み切る道程が語られる。葉子は「峠の際から目茶苦茶に飛び込んでしま」い、「今までみた世界はがらつと変つてしま」う。そして「過去と未来とを断ち切つた現在刹那の眩むばかりな変身に打ちふる」える。後編に展開される倉地との生活は葉子にとって、世間から縁を切った別世界での生活に他ならず、「それは「過去も未来もない」世界、従って退化も成熟もない世界」、「時間なき世界」であると石丸は指摘する。内田満は石丸の二世界をほぼ同じような意味で「外的・物理的時間の流れる世界」と「内的・心理的時間の流れる世界」と換言し、葉子が「その両方の世界に出たり入つたりする」（第三十九章）のを指摘しながら、「浮遊」と「回帰」の構造が『或る女』にあることを解明した。又、田辺健二は「時間なき世界」や「内的・心理的時間の流れる世界」に値する世界にベルクソン哲学の影響を見取り有島文学に於ける時間の構造を分析している。

先行研究を総体的に見てみれば次のような傾向があることが分かる。即ち、論者達は『或る女』世界の時間を二分し、一方に日常的な時間や時計で測れるような物理的時間を割り当て、そこから外れてしまう葉子の「現在」に私秘性や内面性や個性の属性を与えている。それは倉地との愛欲的生活であることが多い為、ここに『惜みなく愛は奪ふ』で展開された個性を遵守する「本能的な生活」の思想に接続する研究者もいる（註四）。本試論はこのような意見に反駁するものではなく、寧ろ後続するものといえようが、葉子にとっての過去の問題はもう少し慎重に考えねばならない論件だろうと思われる。何故なら、葉子というヒロインは過去との対峙を続けながらその現在を生きるからだ。それを「時間なき世界」というように形容するのは些か厳密性を欠いている。「過去と未来とを断ち切」ろうとも過去との対峙は『或る女』本編の中で延々と続く。又それを「内的・心理的時間の流れる世界」と特徴づけることも誤解を招く。葉子にとって例えば過去とは多くの場合具体的に外的世界で記されている痕跡を通じて到来するからだ。葉子は過去を指示する現前、即ち痕跡と出会い、そしてそれを読み多様に感情を変化させながらその時間意識を構成している。葉子にとって過去は具体的な物（者）のようにしてある。恰も精神や心理が独立してあるように示すことは望ましいことではない。我々がなすべきことは、以下テキスト本文を丁寧に読みながら、葉子と痕跡の問題、そして葉子の時間性的問題へと段階的に分析していくことにある筈だ。例えば次のような場面をみてみよう。「古藤さん愛と貞とはあなたに願ひますわ。誰がどんな事を云はうと、赤坂学院には入れないで下さいまし。私昨日田島さんの塾に行つて、田島さんにお会い申してよつくお頼みして来ましたから、少し片付いたら憚り様ですがあなた御自身で二人を連れていらしつて下さい。愛さんも貞ちゃんも分かりましたらう。田島さんの塾に這入るとね、姉さんと一緒にゐた時のやうな訳には行きませんよ……」

「姉さんてば……自分でばかり物を仰有つて」

といきなり恨めしさうに、貞世は姉の膝を揺りながらその言葉を遮つた。

「さっきから何度書いたか分からないのに平気でほんとにひどいわ」

一座の人々から妙な子だといふ風に眺められてゐるのにも頓着なく、貞世は姉の方に向けて膝の上にしなだれかゝりながら、姉の左手を長い袖の下に入れて、その掌に食指で仮名を一字づゝ書いて掌で拭き消

すやうにした。葉子は黙つて、書いては消し書いては消しする字を辿つて見ると、

「ネーサマハイコダカラ『アメリカ』ニイツテハイケマセンヨヨヨヨ」

と読まれた。葉子の胸は我れ知らず熱くなつた」(『或る女』第八章)

これは葉子がアメリカに渡る前親戚や知人によって開かれた送別会での場面である。ここで重要なのは貞世の書記が(一般的なそれとは違って)跡を残さず、意味をもつ一文を獲得するには他者(葉子)の意識という場を必要とするということにある。他者の意識への全幅の信頼、それが貞世にはある。というのも、他者の意識を信頼していなければ、その書記は跡を残さないが故に瞬間毎に抹消され、意味ある単語を構成することはできず、翻つていえば或る持続の相の下で瞬間瞬間消えていく線を繋ぎとめながら単語や文章を構成し伝達しようとするのは、自己(貞世)の意識とほぼ同一の働きをするであろう他者(葉子)の意識を想定して始めて可能になることである。葉子が「掌」になぞられた線を或る一文字として保存し、次に来る一文字と連結させて文章を構成するのは、過去になぞられた線を把持した儘、現在の線と連結させて(「書いては消し書いては消しする字を辿つて」)意味を構成しようとする能動的な他者(貞世)の意識の働きを自身の内で再構成しているからに他ならない。最早過ぎ去ってしまった線の集合を書き込めるのはそのような場(意識)であり、そこに於いて初めて「掌」というノートが成立するのである。

貞世のもつ他者の意識への全幅の信頼。それに触発されるように「葉子の胸」は「熱く」なる。それは単なる無邪気な肉親愛が愛おしいだけではない。通常の書記のように紙や石のような外的物質を使用しないそのコミュニケーション方法は人の真心を表現する手段として強い効果をもつといえる。というのも、「掌」に書かれたメッセージは他者の意識をトレースすることによってのみ読解できる暗号であり、そこには必ずや他者との共働作業が介在せざるをえないからで、外的物質の使用とは異なり、そのコミュニケーションは極めて私秘的なものとなるからだ。つまり、外的物質の使用はその外在性から現前性を離れ、情報の流通性や四散性を帯び、外化されたメッセージは一对一の確定回路ではなく一对多の開かれた不確定回路をもつ。様々な痕跡が時間や空間の相違によって、受容者や当のメッセージに差異を齎してしまうこと、そしてそれがしばしば誤読へ導かれてしまうことは書記の物質性、外在性に由来している。しかし、先のコミュニケーションは主体と対象の対面を不可欠としており、尚且つ、「袖の下」に隠れた肌の表面で指を動かすという無距離的な方法によって情報の流通性や四散性を抑え、限りなく厳密で直接的な一对一の確定関係を築くことに成功している。全く別の他人や外的な物質に邪魔されないその言葉は、人間の真心という真理を代行するに相応しい言葉であり、葉子にとって共働作業のトレースは他者の心と自分とを通い合わせることでできる連帯感を齎してくれる。畢竟、葉子の感動は、自己と他者存在とが相克や闘争なく共存しうるという理想的なコミュニケーション状態の示唆を読み取っていることに起因しているのではなからうか。例えば第六章の葉子が荷造りをしている場面を「掌」の「字」の場面と対比的に読んでみれば、その真理代行性がよく理解できる。

「船に持ち込む四季の晴衣を、床の間の前にある真黒に古ぼけたトランクの処まで持つて行つて、蓋を開けようとしたが、不図その蓋の真中に書いてあるY・Kといふ白文字を見て忙はしく手を控へた。是れは昨日古藤が油絵具と画筆とを持つて来て、書いてくれたので、乾き切らないテレビンの香がまだかすかに残つてゐた。古藤は、葉子・早月の頭文字Y・Sと書いてくれと折入つて葉子の頼んだのを笑ひながら退けて、葉子・木村の頭文字Y・Kと書く前に、S・Kとある字をナイフの先きで丁寧な削つたのだつた。S・Kとは木村貞一のイニシャルで、そのトランクは木村の父が欧米を漫遊した時使つたものなのだ。その古い色を見ると、木村の父の太つ腹な鋭い性格と、波瀾の多い生涯の極印がすわつてゐるやうに見えた。木村はそれを葉子の用にと残して行つたのだつた。木村の面影はふと葉子の頭の中を抜けて通つた。〔中略〕葉子の心は今、おぼろげな回想から、實際膝つき合せた時に厭だと思つた印象に移つて行つた。而して手に持つた晴衣をトランクに入れるのを控へてしまつた」(『或る女』第六章)

葉子は始め自身の名 (Yoko Satsuki) の書き込みを古藤に依頼する。が、古藤はそれを退け、始めに木村の名 (Sadaichi Kimura) を「ナイフ」で刻み込み、その上から新しい婚約者両名の名 (Yoko・Kimura) の「白文字」を描く。葉子の意志はそもそもの始めから裏切られるのだが、更に重要なことは、「Y・K」の文字は一応消去可能なものであるが、その一方刻まれた「S・K」の文字は消去することが困難であるということだ。このことは、倉地との新生活を始め、木村から逃走しても尚、彼に金を斡旋して貰い、その行為に対して最終的に後悔を感じる『或る女』後編世界を暗示している。葉子と木村のカップルが崩壊していても、木村貞一(「S・K」)の名は残り続ける。葉子は最早現前しない過去と縁が切れないのだ。或いは別の見方をすれば、「Y・K」の文字はその場に出席していたような特権的な注釈者がいなければ、最早 Yoko・Kimura とは読めない。事情を知らない者から見ればそれは Yoko・Kurachi かもしれないし、Yoko・Kibe かもしれないし、(些か大胆な読解ではあるが) Yoko・Koto かもしれない(註五)。この書記は「掌」の「字」になかったような誤読可能性を誘発してしまう。これは先にも述べたように、外的物質(「トランク」)の使用によって書記を成立させているからで、跡を残し、現前の関係(一対一的な対面の関係)を攪乱してしまうそれは真理(真心)を毀損させ、読解主体に思いもよらなかったような「厭だと思つた印象」を与えてしまう。「文字に親しむ事の大嫌ひな葉子」(第三十五章)にとってそれは許されざることなのだ。

他者との直接的、無媒介的な交流は可能か。或いは「他者とのまことの連帯は可能か」(註六)と言い換えてもいいが、これが『或る女』という小説の基本テーマである。我々は「掌」の「字」の例を見る限り、この問いに諾の解答を与えたい。倉地との共同生活は典型的で、「二人だけで世界は完全だつた。葉子のする事は一つ倉地の心がするやうに見えた。倉地のかうあり度いと思ふ事は葉子が予めさうあらせてみた。倉地のしたいと思ふ事は、葉子がちやんと仕遂げてみた」とあり、「葉子は倉地の中にすつかり融け込んだ自分を見出す」(第二十六章)。そこに主客の分離はない。又、倉地が自身がスパイであることを葉子に打ち明け、それに対して「倉地を殊更ら突き落して見たい悪魔的な誘惑」を感じた葉子が倉地と共に木村を騙し続けることを決意する第三十三章。「葉子は倉地を引寄せた。倉地に於て今まで自分から離れてみた葉子自身を引き寄せた。而して切るやうな痛みと、痛みからのみ来る奇怪な快感とを自分自身に感じて陶然と酔ひしれながら、倉地の二の腕に齒を立て、思ひ切り弾力性に富んだ熟したその肉を噛んだ」。そして二人は「何もかも微塵につき摧いて、びりと震動する炎々たる焔に燃やし上げたこの有頂天の歡樂」を味わう。ここでは「痛み」のような感覚的所与が媒介となって身体的コミュニケーションが繰り広げられている。「痛み」から来る「奇怪な快感」に応答するように葉子は倉地の腕を噛み、「痛み」を与える。言葉を交わすことよりも、直接的と見られるような身体的感覚の交換が行われているのだ。

或いはこのように過激な場面を選択しないでもいい。妹貞世についていえば、渡米の前日、眠る彼女を抱く葉子は「ひたと共鳴する不思議な響」(第六章)を感じ、貞世の身の上を思い涙する(因みに、葉子は渡米前日無意識に娘定子の住む界隈を訪れ、「心よりも肉体の方が余計に定子のゐる所に牽き付けられるやうに」(第七章)思う。この「肉体」性も「共鳴する不思議な響」と無関係ではないだろう)。その「響」は「同じ胎を借りてこの世に生まれ出た二人の胸」の内に潜在し、これを理解するのに、言葉は不要である。事実、眼を覚ました貞世はその涙を拭いながら、「仕舞にはその袖を自分の顔に押しあて、何か云ひしやくり上げながら泣き出してしま」う。主客がまるで未分離であるかのように、葉子と貞世の真心と呼ぶべきものは呼応し、涙は伝染する。ここでも前言語的な身体的コミュニケーション様式が示唆されている。

しかし、このような直接的(にみえる)コミュニケーションは長続きしない。葉子と倉地の確執は勿論のことだが、理想的なコミュニケーション関係を築いてきた筈の姉妹さえも、貞世が入院する後編の病院での場面になると烈しい相克的関係に迄陥る。つまり、葉子の作ったスープを飲むのを嫌がり「皿を臥てゐながらひつくり返してしまつた」貞世に葉子は我を忘れて「いきなり立ち上つて貞世の胸許をむなり寝台から引ずり下してこづき廻」すのだ。特に、我を失う前に起こる葉子の激昂の調子は異様な程である。

「その痩せ切つた細首に鋏形にした両手をかけて、一思ひにしめつけて、苦しみ悶く様子を見て、「そら見るがいゝ」と云ひ捨てゝやりたい衝動がむずと湧いて来た。その頭の廻りにあてがはるべき両手の指は思わず知らず熊手のやうに折れ曲つて、烈しい力の為に細かく震へた。葉子は凶器に变つたやうなその手を人に見られるのが恐ろしかつたので、茶碗と匙とを食卓にかへして、前垂れの下に隠してしまつた」(『或る女』第四十四章)

真理の言葉を支え、対面する他者の真心を受容していた「掌」は、今度は「熊手のやう」な「凶器」と化してその他者の殺害を夢想する。「同じ胎を借り」たとしても他者は他者でしかない。以心伝心に粗等しいコミュニケーション様式を確立しているようにみえても、その差異が存続する限り、コミュニケーション時に於ける齟齬や誤解の可能性を完全に無化することはできない。葉子の激昂は、その意志の不通の対象が、なまじ「不思議な響」によって身体を分有された肉親だっただけにその絶望も大きく、又貞世の他者性は葉子が夢見ていたであろう誤解なきコミュニケーションのユートピアというものの不可能性を宣告されることに等しかつたのだろう。限りなく透明なコミュニケーションへの熱情はそれが裏切られると、翻つてコミュニケーションそのものを否定する攻撃性(殺害願望)を露わにする。

コミュニケーションのユートピアとそこからの墮落。この移行の所以を葉子のヒステリーに帰属させることは本質的な解答を我々に齎さない。寧ろ、我々が疑うべきなのは、本当にそこに移行と呼ぶべきものがあつたのか、換言すればコミュニケーションのユートピアとは、或いは直接的な、無媒介的な交流とはそもそも不可能なものであつたのではないかということである。「掌」の「字」の例にしても、確かに葉子の身体に書き込まれた「字」は、多くの物質的支持体(紙や黒板や石や「トランク」)に比べ、葉子にとって直接的であるように見える。しかし、逆に考えてみればそのような外在性を葉子は自身の身体という内的な次元に於いて引き入れて身体を外化させているともいえるのではないか。換言すれば反メディア的交流(直接的コミュニケーション)と見えるものは、実の処、身体をメディアとした現前する近距離のコミュニケーションでしかないのではないか。そうして、そこに於いて遠近の問題も差異(距離)があるという大前提の点で大差はないのだ。確かに「掌」の「字」は跡を残さず、情報の四散性を抑えている。だがそれは無痕跡では決してなく、身体的感覚(「掌」で動かされる指に対する連続的な感覚)という痕跡を残す。そうでない限り、それを読み取ることはできない。瞬間瞬間にあるのは描かれた点や線の触感でありそれは「字」ではなく意味を保持しえないからだ。そして二重化する瞬間(書く事と読む事)は差異を産み出し誤解の可能性を切り拓く。

身体メディア性が大きく発露するのは、当のメディアが主体の意志の統治下を離れ、固有の運動をみせる時である。葉子の病はその典型例である。それは意識や意志によって解決できるものではない。勿論、葉子はその病を利用する形で婚約者木村と共にアメリカに渡らず、渡米中密接な関係となつた倉地と日本へ帰ることができた。しかしそれは自身の身体状態に便乗しているだけのことであり、その統御不能な身体性が、後編に於いて葉子の冷静な精神と美貌を老衰させ、破滅への道へ真直ぐと誘つたことは言う迄もないことだ。前述した倉地との「歓楽」も、その「歓楽」の後には「淋しいとも、悲しいとも、果敢ないとも形容の出来ないその空虚さ」が襲い(第三十五章)最終的に「歓楽自身の歓楽は持たなくな」り、「歓楽の後には必ず病理的な苦痛が伴うようにな」る(第三十六章)。直接性の次元は犯され、身体は露骨に媒介項としての性格を帯び(「歓楽」は最早コミュニケーションの目的とならず倉地を引き留めておくためのコミュニケーション手段に墮す)そしてそれに引き続くかのように限界迄摩滅されていく。透明で直接的なコミュニケーションを求めていた者は、媒介なき身体的コミュニケーションを熱望する。しかし、その選択は逆説的に身体という媒介の開放性を露わにし、自分自身を犯す統御不能な異物をも招き入れてしまう皮肉な結果を齎した。

中庸を超えてはならない、と我々はそう葉子に言うべきだろうか。しかし、そのような助言を葉子は作

中にあるのと同様に「私は一旦かうと決めたら何所までもそれを通すのが好き」(第十九章)や「何んでも私本当が知りたい」(第三十六章)と一蹴するに違いない。葉子は極限を、失われた直接性を目指す。そこに妥協は許されない。

我々は読む葉子、痕跡を辿る葉子から考察の端緒を求めた。そして、この極限への傾向もやはり葉子の痕跡読取に明確に現れている。例えば、倉地との生活の陰りが見えてきて、自殺等の「空想」によって葉子は「前後も知らず家を飛び出し」、倉地の下宿近くで双鶴館の女将を思わせるような女を見る場面。彼女を通じて倉地は妻との関係を復縁させようとしているのではないかと邪推する葉子はその人力車の後を追跡する。「もう十間と云ふ位の所まで来た時車はがらと音を立て、砂利道を動きはじめた。葉子は息気せき切つてそれに追いつかうとあせつたが、見るその距離は遠ざかつて、葉子は杉森で囲まれた淋しい暗闇の中にたゞ一人取残されてみた。葉子は何んと云ふ事なくその辻車のみた処まで行つて見た。一台よりみなかつたので飛び乗つて後を追ふべき車もなかつた。葉子はぼんやりそこに立つて、そこに字でも書き残してあるかのやうに、暗い地面をぞつと見詰めてみた」(『或る女』第三十九章)

「砂利道」は人力車の通った跡を残さない。しかしそれ以上に「辻車のみた処」に読み取れるものは何もない。しかし葉子は「ぼんやりそこに立つて、そこに字でも書き残してあるかのやうに、暗い地面をぞつと見詰め」る。葉子がやっていること、というよりやろうとしていることは「掌」の「字」の読取と同じことだ。葉子は貞世が「何度書いたか分からない」「字」を何度もスルーし、それを指摘されたことで始めて貞世の指画行為を有意味の信号(「字」)として認知する。ここから分かる通り、指画行為が意味ある「字」として成立し尚且つ文として連結されていく為には、それを受け取る者の注意的な予期が要請される。貞世が試みた「何度書いたか分からない」「字」は予期の欠如が故に意味を持たず、無論文も形成しえず、看守されない儘見逃され、消えていった。逆にいえば、予期の方法によっては一見痕跡が残されてないような世界の内に、顕れる痕跡とその背後世界(意味)を発見できる可能性が主体の側には常にある。葉子はだからこそ、痕跡なき「暗い地面をぞつと見詰め」、そこで起きた全てを読み取ろうとする。何も残されていない「掌」の指画行為を辿るのと同様、「そこに字でも書き残してあるかのやうに」。

「掌」の「字」は貞世の真心(真理)を与えてくれた。葉子にとってそれは間違る筈がない極限であった。これと同様に、極限への傾向は過去の読取が完全に可能だと教え、端緒としての痕跡を顕在化させる為、葉子に空虚への凝視を科す。しかし、葉子のその試みは頓挫する。人間の様々な意志や意識は痕跡を残すとは限らず、例えそれを残し、例えそれを発見できたとしても、主体が明確な過去を指示する(充実した意味を指示する)ような解釈へ至らしめることは多くの場合不可能となる。或いは誤読を招く。痕跡とは過去を指示する現前であるが、その過去が内容的に確定しない場合、その現前は謎と化す。これは直接的コミュニケーションを目指す者、葉子にとって最大の障害としてある。何故ならば、謎と化した痕跡は正統な(過去と現在の)回路を瓦解させ、あらゆる過去の可能性に開かれながら、コミュニケーションを誤解や失敗へ導いてしまうからだ。

二、書かない女

我々は読む主体として葉子を見てきた。そしてその主体は現前の関係や極限迄直接的なコミュニケーションを志向する主体であることを確認した。その主体にとって、通常の書記は起源的な出来事としての過去の指示を誤る。後編の始まりの第二十二章で、葉子は久しぶりに日本で新聞を読むが、「今の葉子にはそれが不思議に自分とはかけ離れた事のやうに見えた」のは、単に倉地との新生活が「時間なき世界」(石丸晶子)という別世界への入門であっただけではなく、そもそも、そのように四散し複製し続ける言葉で真理を保証することはできないという判断があることに由来しているとみていい。葉子に届くのは例えば倉地が「まじと見すゑながら」言う「あなたに惚れてみた」という対面的告白であり、葉子はそんな「言葉」だけを「貪」り、「噛みしめ」「而して呑み込」むのだ(第十七章)。思えば、「新聞」は葉子の生活に決定的なカタストロフを与えている。嘗て母親佐と共に「不倫な捏造記事」を書かれ、母の側は紙上で訂正されたが、己のその冤罪は放置された儘であったし(第二十五章) 又倉地が事務長の職をおわれるのは田川夫人の手にかかった「報正新報」のスキャンダル記事が原因であった(第二十九章)。或る見方をとれば、葉子の破滅は書記の情報四散性、そこから帰結する誤伝性から齎されるともいえる筈だ(註七)。

或いは、木村の電報に関する三者(葉子、倉地、木村)のやり取りはこの文脈に於いて興味深い。第十九章で、葉子は木村と再会し「私の電報をビクトリヤで受取つたでせうね」という木村の確認に葉子は適当に返事をする。しかし遅れてやってきた倉地が二人の間に到来し、「木村さんからあなたに電報が来とつたのを、私やビクトリヤでのどさくさでころりと忘れとつたんだ。済まん事でした。こんな皺になりくさつた」と言って「揉みくちやになつた電報紙を取出」す。それに対して葉子は、瞬間的に「ちやんと拝見したぢやありませんか」と応答し倉地に目配せをする。倉地は「これは寝呆け返つとるぞ、はゝゝゝ」と笑い、葉子、木村もそれに続くように笑い出す。この一連の場面で第一に指摘できることは、書記はその四散性から遠距離のコミュニケーションを可能にするが、その分、そのメッセージが他者に伝達されるかどうかは現前的なそれに比べて常に不確定となる危険性を伴ってしまうということだ。木村の手を離れた「電報」は他人の手に渡り倉地の下へ送り届けられる。しかし倉地は葉子にそれを渡すことを忘れてしまう。「電報」はほんの些細なミスで伝達されない。或いはそれは他人の下へ届けられてしまう。葉子は正しく書記流通の不確定な回路に翻弄されて、木村に対して無関心であることを露わにしてしまう場面に直面してしまうのだ。しかし、第二点として、その書記で攪乱された危機的場面を救うのは、やはり現前的関係であり、葉子は瞬間的(instant)に倉地と共謀して正統に伝達された過去をでっち上げる。その関係は遅延することなく即時的=即応的(instant)なものであり、二人は場を取り繕うことに成功するのだ。

葉子はコミュニケーションのユートピアを目指す。しかし、その外的物質の使用によるような書記は些細なアクシデントで、そのメッセージが伝達されないという帰結を齎す。又もし送り届けられたとしても、その時間差や空間差から真理を歪め、或いは謎めき、誤伝や誤解を不特定に多発させてしまう。では、そのような書記を忌避し現前の関係を切望する主体葉子はどのように字を書いていたのだろうか。換言すれば複数の過去の可能性に開かれてしまう痕跡の不確定性に対して葉子はどのような確定化の努力を行ったのだろうか。

回答すれば、葉子は努力しない。葉子は木村の手紙にある「一日貴女に書き続けてもなお飽き足りないのです」や「貴女に書くことは底止なく書く事です」といった文句に应答するように、「書けばきりが御座いません。伺えばきりが御座いません。だから書きも致しませんでした」と手紙に書く(第三〇章)。葉子の主張は一貫している。「電報」の例でも明らかなように書記は時間を越えてその瞬間のずっと後迄残り、時間差(タイムラグ)を産み、伝達者と受容者、痕跡とその読解の対応を攪乱してしまう。書記に依頼する

限り、いま・ここ という現前を伝達する為には無限に書かざるをえない。「書けばきりが」なく「書くことは底止なく書く事」なのだ。直接的コミュニケーションを志向する者にとってそれは、無限の齟齬を産むことしか意味しない。極限迄読もうとする葉子はその延長で書記によって誤読されてしまう可能性を許せない。よって葉子は書くことを極力放棄するのだ。

象徴的なのは第十七章、葉子が徒ら書きをしている場面だ。長くなるが引用しよう。

「何の気なしに小卓の前に腰をかけて、大切なものゝ中にしまつておいた、その頃日本では珍しいファウンテン・ペンを取り出して、筆の動くまゝにそこにあつた紙きれに字を書いてみた。

「女の弱き心につけ入り給ふはあまりに酷き御心と唯恨めしく存じ参らせ候〔「参らせ候」の原文は草書体〕妾の運命はこの船に結ばれたる奇しきえにしや候ひけん心がらとは申せ今は過去の凡て未来の凡てを打捨てゝ唯眼の前の恥かしき思ひに漂ふばかりなる根なし草の身となり果て参らせ候〔右に同じ〕を事もなげに見やり給ふが恨めしく死」となんの工夫もなく、よく意味も解らないで一瀉千里に書き流して来たが、「死」という字に来ると、葉子はペンも折れよといらしくその上を塗り消した。思ひのまゝを事務長に云つてやるのは、思ひ存分自分を弄べと云つてやるのと同じ事だつた。葉子は怒りに任せて余白を乱暴に徒ら書きで汚してゐた。

と、突然船医の部屋から高々と倉地の笑声が聞えて来た。葉子は我れにもなく頭を上げて、しばらく聞耳を立てゝから、そつと戸口に歩み寄つたが、後はそれなり又静かになつた。

葉子は恥かしげに座に戻つた。而して紙の上に思ひ出すまゝに勝手な字を書いたり、形の知れない形を書いて見たりしながら、づきんづきんと痛む額をぎゅつと肘をついた片手で押へて何んと云ふ事もなく考へつゝけた。

念が届けば木村にも定子にも何んの用があらう。倉地の心さへ掴めば後は自分の意地一つだ。そうだ。念が届かなければ……念が届かなければ……届かなければあらゆるものに用が無くなるのだ。さうしたら美しく死なうえ。……どうして……私はどうして……けれども……葉子はいつの間にか純粹に感傷的になつてゐた。自分にもこんなおぼこな思ひが潜んでゐたかと思ふと、抱いて撫でさすつてやりたい程自分がか可愛ゆくもあつた。而して木部と別れて以来絶えて味はなかつたこの甘い情緒に自分からほだされお溺れて、心中でもする人のやうな、恋に身をまかせる心安さにひたりながら小机に突伏してしまつた。

〔中略、倉地が来訪する〕

葉子は手早く小机の上の紙を屑籠になげ棄てゝ、ファウンテン・ペンを物陰に放りこんだ。而してせかとあたりを見廻したが、慌てながら眼窓のカーテンを閉め切つた。而して又立ちすくんだ、自分の心の恐ろしさにまどひながら) (『或る女』第十七章)

「紙」を「屑籠」へ、「ファウンテン・ペン」を「物陰」へ放棄することは何よりも書記の放棄を象徴する。「念が届かなければ」「あらゆるものに用が無」いと葉子は思う。この場面が続くのは先に引用した倉地の「あなたに惚れてゐた」という告白であり、そのような「貪」れる言葉が「念」を伝達することに比べて、書記の形式では「念」の伝達は不十分にしか行われず、その欠点を補助しようとするのならば、それは書き手に注釈という形で無限の書記を命じるだろう。葉子にとってその行為は意味がない。

葉子は重要な要件について読もうとしながらも書こうとはしない。換言すれば、葉子は痕跡の回収には必死になるが、痕跡の散布については慎重だ。これもある意味では当然だろう。「S・K」の文字のように一度外的物質に刻印されてしまった痕跡を消すことは容易ではなく、又(新聞や手紙のもつような)空間差や時間差から多くの誤読を産んでしまう。葉子はこのような不純で不透明なコミュニケーションに参加しようとはしないのだ。

後編の最後、葉子は手術を受ける直前遺書に等しい書き物を女中のつやに書かせたが、それを最終的に「今見ている前で焼いて捨てると命じ」るのはここに由来している(第四十九章)。葉子は「死んだ後には何

んにも残しておきたく」なく、「何んにも云はないで死なう」とする。遺書さえ口頭であった葉子は最後迄書記という表現形式を信用しないのだ。葉子の脳裏には「皺になり」「揉みくちやになつた」、あの「電報紙」があるのかもしれない。それは外的物質を使用し、他人の介在で送り届けられる危険を孕んだ言葉であり、ほんの少しのアクシデントで目標の他者に「念を届かせ」ることは失敗してしまう。葉子自身がそのメッセージを受領した偽装をして、「電報」の経緯を歪曲していたことが書記の不可能性を暗示していたのだとすれば、皮肉にも、葉子は遺書の焼却を自分自身に科してしまうのだ。

しかし例えば次のような場面を想像してみよう。「屑籠」のごみを回収する係の者が偶然その中の「一瀉千里に書き流し」た文や「勝手な字」、「形の知れない形」が書き記されてある「紙」を入手し、それを一所懸命に読もうとするかもしれない。その結果、それらの文字に対して主体（葉子）が思いもよらなかったような解釈を付してしまうのかもしれない。過剰な予期はそれを可能にする。黒く塗りつぶされた「死」の文字、或いは意味を成さない「形」も、そこに意味を見出そうとする者が参加すれば立派な信号となる。そしてこれは正しく葉子が「暗い地面」に「字」を読み取ろうとした行為に他ならない。このような点から葉子を批判することができる。葉子は或る痕跡から確定化可能な過去への遡行を試みる。しかし、その一方で自身はそのような痕跡を産み出すことを否定し誤解を恐れる。葉子には一種の不均衡がある。それは読むことの参加と書くことの拒否という具合に要約できるが、その不均衡は葉子の中に避けがたい矛盾を形成する。つまり、葉子は書記を不信することで、その読取が成功するとは限らないということ、そしてそれでも読もうとする者は誤伝誤読へ導かれるということは何よりも自分自らの行為によって証明してしまっているのである。又痕跡とは必ずしも意図した痕跡ではないという点でも彼女を批判できるだろう。事実、「勝手な字」や「形の知れない形」に意図が込められている訳ではなく、そこに意図や意味を読み取るのは過剰な予期をもった読解者だけである。葉子は後編に於いて自分と倉地とのスキャンダルが世間の噂となってしまったことに対し「愛子と云はず貞世の上にも、自分の行跡がどんな影響を与えるかも考へずにはあられなかつた」と思う。葉子が痕跡だとは思ってもいなかっような彼女の行動や立ち居振る舞いが、（例えば新聞の一面を飾り）一種の信号として他者に提供され読み解かれる。姉妹にも影響が及ぶのかもしれないという危惧は彼女の中の不均衡を告発し、知らず知らずの内に読取可能な痕跡を世間に散布してしまった結果のみを彼女に齎すのだ。

葉子はしばしば対面する者の顔から心中を「読もう」とする。例えば帰国後に初めて古藤に出会った時も「古藤の顔に浮かび出るすべての意味を読もうとし」（第二十五章）又愛子と倉地との関係を邪推しながらその「面」に「書かれたすべてを一時に読み取ろうと」（第四十三章）する。しかし表情という痕跡の読取など成功する方が難しく、自然深読みへ陥らなければならない。葉子の予期はそれでも読取への執着を曲げない。そうして葉子は間違った過去、或いは一度としてありもしなかつた過去へ誘われる。葉子の書記への拒否はそのことを予告している。

三、謎と過去

我々はこちらから『或る女』に於ける時間の問題を取り扱うことにしよう。

痕跡は過去を指示し、現在と過去の紐帯を証する。しかし、その一方でその時間的な秩序を混乱させてしまうような、謎としての痕跡も又存在する。それは読む葉子に不思議な感覚を与える。一つには葉子のデジャヴ（既視感）体験がある。

「門を出て左に曲らうとして不図道傍の捨石にけつまづいて、はつと眼が覚めたやうにあたりを見廻した。矢張り二十五の葉子である。いゝえ昔たしかに一度けつまづいた事があつた。さう思つて葉子は迷信家のやうにもう一度振返つて捨石を見た。その時に日は……矢張り植物園の森のあの辺にあつた。而して道の暗さもこの位だつた。自分はその時内田の奥さんに内田の悪口をいつて、ペテロと基督との間に取交はされた寛恕に対する問答を例に引いた。いゝえそれは今日した事だつた。今日意味のない涙を奥さんがこぼしたやうに、その時も奥さんは意味のない涙をこぼした。その時にも自分は二十五……そんな事はない。そんな事のあらう筈がない……変な……」（『或る女』第七章）

渡米前日、葉子が昔の恩師内田の家を訪ねた後の帰り道の場面である。葉子は「捨石」に躓き、彼女はそれと全く同じことが嘗て起こったという感覚を覚える。所謂デジャヴである。ここで我々は前述したような痕跡の性質を前提として考えてみるならば、次のような解釈が許されるであろう。つまり、現在ある痕跡（「捨石」）は或る過去を指示する。だが確定的な過去は見出されず、起源は忘却され遡行は失敗し、参照項を欠いた意味獲得の試みは回帰線を描き、当の現在を何度も反復するようなループ状態へ陥る。そこでは、二十五歳の葉子が捨石に躓くという出来事と同じことが二十五歳の葉子に起こった、という同語反復しか齎さない。現在の併置が延々と続くだけだ。しかし、そんな中葉子は記憶の回復、過去の呼び寄せに一応成功する。

「それにしてもあの捨石には覚えがある。あれは昔からあすこにちやんとあつた。かう思ひ続けて来ると、葉子は、いつか母と遊びに来た時、何か怒つてその捨石に噛付いて動かなかつた事をまざと心に浮べた。その時は大きな石だと思つてみたのにこれんぼつちの石なのか。母が当惑して立つた姿がはつきり眼先きに現はれた。と思ふとやがてその輪郭が輝き出して、眼も向けられない程耀いたが、すつと惜気もなく消えてしまつて、葉子は自分の体が中有からどつしり大地に下り立つたやうな感じを受けた。同時に鼻血がどく口から顎を伝つて胸の合わせ目をよごした」（『或る女』第七章）

しかし、ここで想起された「捨石」は本当に現在時に於いて躓いた「捨石」と同一なものなのだろうか、と問うことは重要だ。「道傍の捨石」が何年も同じ場所にあり続けているということは現実的に考えて疑わしい。そうして更に、その石が同一の物であったとしても、葉子の想起は現在時に於いて石に躓いたという出来事と完全には呼応していない。葉子が思い出したのは母親の姿と「何か怒つてその捨石に噛付いて動かなかつた事」であり、「昔たしかに一度けつまづいた事」ではないからだ。葉子は痕跡読取によって明確な過去へ遡行しようとする。しかし「捨石」という謎は、葉子にデジャヴを与えるだけで充実した意味を齎さない。参照項を失った現在は併置され続ける。そこで葉子は同じ「捨石」についての記憶を母のそれと共に思い出す。だが、そこで見出された記憶は現在起きた出来事と完全に対応している訳ではない。読者にとって、或いは葉子自身にとっても、ここでの痕跡とその出来事の対応関係を一対一的な確定化へ導くことは難しい。葉子の忘却の先に見出された記憶は、もしかすると別の記憶、つまりは「昔たしかに一度けつまづいた事」は実際にあり、それを葉子は未だに思い出せず、石と母の記憶を単に誤伝されただけなのかもしれない。或いは、そもそも嘗てそのような出来事はなく、過去の石の躓き事件は現在時の葉子が勝手に捏造したものにすぎないもので、石と母の記憶はそれとの類似で検索された際、偶然に出現しただけ

なのかもしれない。

事の真相を読者が洞察することは最早不可能だ。そしてそれは恐らく葉子にとっても同様だ。ここが正しく重要な点である。葉子の前には数々の痕跡が現れる。葉子はそれを必死に読解しようとする。しかし、しばしば痕跡は謎と化し、全く別の過去を誤伝してしまう。否、厳密に言えば読解主体にとってさえそれが誤った過去との接続なのか、それとも正統な接続なのかどうか判別不可能なものへと化してしまうのだ。換言すれば、葉子の現在性は過去の幻影に付き纏われながらも、その過去を確定することができず、振り払うことができない儘過去の侵食を受ける。

或いは、横浜埠頭に於いて汽船出発を待つ葉子が「誰だとも、何時何所で遇つたとも思ひ出す由のない」若者にいきなり「びしょ濡れになつた酔どれの腕でがつしりと捲かれた」事件を思い出してもいいだろう（第九章）。若者は「葉子さん覚えてみますか私を……あなたは私の命なんだ。命なんです」と葉子に縋るが、葉子にとってこの若者との接触の由来（「由」）は不明である。葉子は木部と別れてから「誰れ彼れの差別もなく近寄つて来る男達に対して勝手気儘を振舞つた」期間があり、若者はそこでできた過去の一関係なのかもしれない。しかし依然として彼女には「少しも思ひ当る節がなかつた」。この若者も又謎である。その痕跡は執拗に過去との接続を誇示するが、読解主体にとってその可能性を限定することは難しく、だからといって無数の過去に開かれその接続が曖昧であったとしても、痕跡の存在そのものを如いては過去の現存を拭うことはできないのである。葉子は「始めて起つた事が、如何しても何時かの過去そのまゝ起つた事のやうに思はれられない事がよくあ」という癖をもつが（第四〇章）時間的な秩序を乱す謎こそが、正統な接続を混乱させ一つの痕跡は嘗て一度としてなかつたかもしれないものを含めたあらゆる過去の可能性に開かれながら、葉子の現在性を蝕むことに起因しているのである。

過去は執拗に葉子の背後を追う。葉子にとって「心にもない渡米」とは「生れ代つた積りで米国の社界に這入りこんで、自分が見付けあぐねてみた自分といふものを、探し出して見よう」とする新たな旅路であった（第十六章）。「今までの狭い悩ましい過去を縁を切つて、何の関りもない社界の中に乗り込むのは面白い」（第十一章）のだ。それは勿論因習的な日本という土地やそこにいる人々との別離を意味する筈であった。しかし葉子は過去の痕跡を目敏く見出してしまふ。つまり、葉子の乗る船が出港する際、彼女の叔父叔母も見送りに来るのだが、葉子にとって叔母の「後姿」は母親のそれと酷似している。

「葉子はちらつと叔母の後姿を見送つて驚いた。今の今まで何処とて似通ふ所の見えなかつた叔母も、その姉なる葉子の母の着物を帯まで借りて着込んであるのを見ると、はつと思ふ程その姉にそつくりだつた。葉子は何んといふ事なしにいやな心持ちがした」（『或る女』第九章）

母親佐のその着物の借用を申し出た叔母に葉子は「働きのない良人に連れ添つて、十五年の間丸帯一つ買つて貰へなかつた叔母の訓練のない弱い性格が〔中略〕虫唾が走る程憎かつた」（第六章）と感じている。葉子の「いやな心持ち」は勿論そのことを引きずっているのだが、それだけではない。というのも、その「いやな心持ち」は母親佐と「そつくり」だったことに由来しているからだ。遺伝性により（これは病に次ぐ身体の媒介性の一つなのだが）、死んだ筈の母は反復し、葉子の前に再び姿を現す。「生れ代」る為の旅路の始まりに過去の亡霊が現れ新生活の雲行きを危うい形で暗示させる。実際葉子は「何所か外国に生れてゐればよかつた」（第六章）にも関わらず、アメリカの陸地を踏むことなく旧制の家父長的な日本へとんぼ返りしてしまう。

誤解してはならないが、テキスト内で葉子は決してアクティブ（能動的）ではなく、パッシヴ（受動的）なヒロイン像として一貫している。山田俊治は「葉子にとっての行為とは、自己の主体的な選択の前に、あらかじめ選択され、決定されたところへ自己を投げ出すことでしなかつた」と記述し（註八）又高橋世織は「積極的な葉子像よりは、受動的な、そしてどう行動したらよいかわからないでいるというのが彼女の本質」と指摘するが（註九）それは恐らく妥当だろう。パッシヴなパトス（受苦）これが葉子を苦しめ

続ける。そしてその根源にパスト（過去）がある。要するに早月葉子は過去から脅迫を受け続ける無力なヒロインなのだ。但し、ここでいう過去とはルプレザンタシオン representation（表象＝再現前化）によっては把持することのできないような（例えば「捨石」のデジャヴのような）記憶の外の過去のことを意味している。ここでは過去と痕跡の対一関係が確定されず、痕跡は誤伝的なものも含めた様々な過去の可能性を指示するような対多の開放的回路に開かれている。この過去の位置付けは両義的だ。一方で過去は「S・K」の文字が消えないように、葉子の背後に付き纏いその正体を明らかにできない儘、その接続に主体は脅かされる（過去の切断不可能性）。しかしもう一方で主体にとってその過去をやり直すこと、過去へ回帰することはありえない。その過去は定義上もう既に過ぎ去ったものであり、現在に融即されることはありえず、踏破不能な差異を保ち続ける（過去の回収不可能性）。不図した瞬間にその差異は葉子に向かって襲ってくる。

「葉子は今の心と、今朝早く風の吹き始めた頃に、土蔵わきの小部屋で荷造りをした時の心とを較べて見て、自分ながら同じ心とは思ひ得なかつた」（第七章）

「息気づまるやうな今朝の光景や、過去のあらゆる回想が、入り乱れて現はれて来ても、葉子はそれに対して毛の末程も心を動かされはしなかつた。それは遠い木魂のやうに虚ろにかすかに響いては消えて行くばかりだつた。過去の自分と今の自分とのこれほどな恐ろしい距りを、葉子は恐れげもなく、成るがまゝに任せて置いて、重く澱んだ絶望的な悲哀に唯訳もなく何所までも引張られて行つた」（第十六章）

「葉子は長い航海の始終を一場の夢のやうに思ひやつた。その長旅の間に、自分の身に起つた大きな変化も自分の事のやうではなかつた」（第二十二章）

「物心附いてからの自分の過去を針で揉み込むやうな頭の中でずつと見渡すやうに考へ辿つて見た。そんな過去が自分のものなのか、さう疑つて見ねばならぬ程にそれは遥かにもかけ隔つた事だつた。父母 殊に父の嘗めるやうな寵愛の下に何一つ苦勞を知らずに清い美しい童女としてすらと育つたあの時分が矢張り自分の過去なのだろうか。〔中略〕絵島丸の中で味ひ尽し嘗め尽した歡樂と陶醉との限りは、始めて世に生まれ出た生甲斐をしみと感じた誇りがな暫らくは今の自分と結び付けていゝ過去の一つなのだろうか……」（第四十五章）

如何なる具体的事件が葉子をこのような時間的孤独へ導いたかは措くとして、テキスト内で隔絶的な過去の「距り」に何度も葉子が襲われることについて無視はできない。葉子にとって単数乃至複数の過去の帰結として現在が結実する（過去の切断不可能性）。その継起的歴史性を否定することはできないし、それがなければ「掌」の「字」のようなコミュニケーションは不可能となってしまう。しかし、その過去は現在の原因として一種の近接性をもっているが、その隔たりは飽くまで保たれ、過去をやり直すことは出来ず、過ぎてしまえば主体にとって何の必然性ももたない、即ち偶有的であるような余所余所しさをも兼ね備えている（過去の回収不可能性）。これこそが痕跡に仮託された時に生じてしまう不確定な開放的回路の発生の根本因である。時間は不可逆的であり永遠に差異を生み出すものなのだ。

整理しよう。現時の葉子は様々な痕跡を発見する。痕跡は或る過去を指し示し、その存在はその存在自体で過去と現在の紐帯を証明する。過去は切断できない。しかし痕跡を読解する主体にとって、その過去は必ずしも充実した意味をもった確定状態へ導かれる訳ではなく、誤伝誤読（と呼ぶべきような読解や解釈）へ至る可能性も十分にある。それは一旦過ぎ去ってしまった出来事は現時に於いて回収することはできなく、これは過去というものが差異を保ちながら尚現在に纏わりつく時間の不可逆性に由来している。過去の忠実な再現（反復）でさえ時間の不可逆性に於いては新たな出来事の生起しか意味しない。過去回帰は不可能であり、過去を指示する痕跡も又様々な回路に開かれるのだ。

しかし、一つの問いとして葉子はそのような生の条件に対して単純に降伏したのだろうか、ということが挙げられる。恐らくはそうではない。葉子はそのような不可避的な条件に否を突きつけ、そこから逃走

し続けたヒロインでもあった。前編に於ける（列車や船を使用した）絶え間ない移動は、後編の動けない葉子との対比を描きながらその逃走を象徴している。

四、過誤と越境

葉子はテキスト内で何度も、過去に起こってしまった誤謬（過誤）について言及している。「不幸にも時と所とを間違えて天上から送られた王女」（第四十五章）という自分に対する矜持を思い出す葉子は、例えば倉地を「自分と同様に間違つて境遇づけられて生まれて来た人間」（第十六章）であると規定し、又彼の生活を進めて行くうちに「如何しても間違つた方向に深入りしたのを悔いないではゐられなかつた」（第三十七章）と反省する。そして最終的には遺書に於いて倉地に「二人とも間違つてゐた事を今はつきり知りました」（第四十七章）と書く。

当たり前のことだが、誤謬は無謬の背面として存在する。葉子が何度も自分の「間違」いについて言及する時、恰も、或る時点の意志とその行動の如何によってはその「間違」いを正すことができると信じているかのようだ。しかしそれは本当だろうか。葉子が徹底的にパッシヴなヒロインであることは確認したが、後悔する葉子はその受動的必然性を否定し、遡行するようにして事後的に能動的な選択主体を仮想している。その仮想主体の審級からみれば葉子の選択は「間違」いであり、別の選択肢を決定していればその誤謬は回避できる。しかし、それは飽くまで仮想上のことであり別の選択肢を決定したからといって「間違」いを犯さないと明言できる訳ではない。しかしそれでも葉子は「間違つてゐた……かう世の中を歩いて来るんぢやなかつた。然しそれは誰の罪だ。分からない。然し自分には後悔がある」（第四十七章）と反省する。「罪」という言葉を因果関係で捉えてもよいのならば、誰の原因（「誰の罪」）で葉子の境遇が決定したのか、葉子には「分からない」。それは自分かもしれないし、他人かもしれないし、社会や時代かもしれない。しかし、それでも「自分には後悔がある」のだ。

このことを二章で展開した過去の議論と接続してみよう。葉子の背後には蓄積された過去があり、それなしに現在は成立しえない（過去の切断不可能性）。しかしその一方で現在時からみて、過去と現在を繋ぐ回路を探索すれば「深い悲しい神秘に包まれて」単一の回路は不明瞭になり、複数の回路、複数の可能性を潜在させてしまう。それは時間の不可逆性に由来しており、一旦過ぎ去った出来事は決して回収することができず、過去が一種の余所余所しさを帯び、事後的にみれば様々な可能性に開かれるようにみえるからだ（過去の回収不可能性）。ここに於いて原因（「罪」）を誰かに、或いはどの時点の自分に、或いはどの出来事に帰属させればいいのか判断することは難しい。勿論仮想はどのような形であれ可能であるが、それは時間の不可逆性に逆らった可逆的（時間遡行的）な想像力の使用なしには設定しえず、常に現在と乖離する。そうして、尚重要なことだが、それでも「後悔」は自身の内にあり、「生きている中にそれを償つておかなければならない」（第四十七章）のだ。

葉子は自分に例え咎がなくともそれに対して責任を持つととする。それは本質的に無限に開かれたレスポンスビリティ（責任＝応答可能性）だ。選択反省主体は倫理主体として転回する。この点に於いて『或る女』という小説が単なる悪女の一生を描いた物語ではなく、実存（人間存在）が直面する不可避な時間秩序とそこからの反抗という生のドラマであることが指摘できると思われるが、我々は些か先に進みすぎているようだ。

葉子は「間違つて」しまった。その発端を確定することはできないが、一方で葉子は「時と所」の過誤で自身の境遇が帰結されているともテキスト内でしばしば反省している。

「葉子は〔中略〕何所か外国に生れてゐればよかつたと思ふやうになつた。あの自由らしく見える女の生活、男と立ち並んで自分を立てゝ行く事の出来る女の生活……古い良心が自分の心をさいなむたびに、葉子は外国人の良心といふものを見たかと思つた」（『或る女』第六章）

「生まれ代つた積りで米国の社界に這入りこんで、自分が見付けあぐねてみた自分といふものを、探り出して見よう。女といふものが日本とは違つて考へられてゐるらしい米国で、女としての自分がどんな位置に坐る事が出来るか試して見よう。自分は如何しても生まるべきでない時代に、生まるべきでない所に生まれて来たのだ。自分の生まるべき時代と所とはどこか別にある」(『或る女』第十六章)

「物心附いてからの自分の過去を針で揉み込むやうな頭の中でずつと見渡すやうに考へ辿つて見た。〔中略〕自分は今の日本に生れて来べき女ではなかつたのだ。不幸にも時と所とを間違へて天上から送られた王女であるとまで自分に対する矜誇に満ちてみた」(『或る女』第四十五章)

葉子は己の生をそもそもの初めから呪詛されているとしばしば反省する(「私は生れるとから呪われた女なんですもの」(第二十一章))。葉子の思いも分からないではない。世界の内に投げ込まれて在るという人間存在の基本性格は一種悲劇的な効果に他ならなく、「生まるべき時代と所」は選択不能であり、存在することとは世界に遺棄されながら存在することであるという不条理を拭い去ることはできない。確かに葉子が生まれたのが(勿論これは可逆的な想像力の使用であるが)明治初期の日本ではなくアメリカや或いは現代の日本であるとしたらその境遇は大きく異なったものとなっていただろう。葉子は具体的な脱出路が分からない儘、それ故に「どこか別」の場所への移動を飽くことなく希求する。そして、その「どこか別」の場所が「外国」として葉子に表象される。

しかし、実際外国へ赴いたことのない葉子(渡米の企ても結局はその地を踏まず帰還し、失敗に終わる)にとって、「外国」の表象は「らしく見える」や「考へられてゐるらしい」といった具合に推量的な想像の枠を超えない。逆にいえば、葉子の「自由」のある「外国」はアメリカやフランスといった具体的なあれやこれやの国々である必要はない。それは「どこか別」の場所であり、直言すれば自身を受け入れてくれるユートピア(非場所)を意味している。ユートピアを目指す旅、これは前述したように絶え間なく移動をし続ける前編の葉子に象徴されている。新橋から横浜、東京へ帰ってきてもすぐさま再び横浜、そしてアメリカへ。休む間もなく葉子の位置は変化し続ける。そんな中で葉子は自分と共に「間違つて」しまった運命の男倉地と出会いロマンスへ至るのだ。そうして具体性を欠いたユートピアは倉地の登場と共にコミュニケーションのユートピアとして葉子の眼前で目標化し、葉子は「外国」でない日本へ還ってきて、ユートピア的空間に住み込むことができる。つまりその空間は「二人だけで世界は完全」であり、「葉子のする事は一つ倉地の心がするやうに見えた」(第二十六章)という理想的なコミュニケーションを体現しているのだ。それは「どこか別」の場所であり、繰り返しになるが、研究史の上では「時間なき世界」(石丸晶子)や「内的・心理的時間の流れる世界」(内田満)と形容されてきた。

但しここでも、その旅路は極めてパッシヴなものであったということはすぐさま付言しておかねばならない。高橋世織は前記の論文で「搬ばれるものとしての葉子という行動原理」に着目しているが、卓見だ。前段では前編に繰り返される移動を恰も能動的なもののように論じてきたが、葉子の動因は常に自発的なものではなかったし(例えば木村との半強制的な婚約)或いは実質的な移動を担っていたのは「汽車」や「絵島丸」といった多人数を収容する移動手段であった訳で、そこで実動するのは機械であり、葉子自身はその中で「搬ばれるもの」としてあった。或いは後編にしても高橋の指摘するように「小さな田舟」(第三十七章の木部による川渡し)や「病室のベッド」(第四十五章で葉子は金銭の問題から転院を余儀なくする)も葉子をまるで物のやうにして運搬し、葉子はその空間を受動的に甘受するしかなかったのだ。「漂ふばかりなる根なし草の身」という前述した倉地宛の書き物の言葉が皮肉にも真実味を帯び、葉子は自身の結末をその最後の最後に至る迄予告してしまうのであるが、その定着点の欠如は依然として両義的な役割を担っているのだと指摘することができる。第一に「根なし」は葉子に非場所探求の旅を許し、葉子は様々な場所を訪れる。しかし、第二にその移動は多く受動的なものであり、葉子は己固有の場所を剥奪され続けながら流浪を余儀なくする。

我々は飽く迄この受動性を考慮に入れながら、『或る女』というテキストを越境のテキストだと規定してみることにしよう。この越境は異なる世界への越境、特にユートピア、如いてはコミュニケーションのユートピアへの移行であるが、詰まる処『或る女』というテキスト内に於ける葉子の移動とは越境的移動であった。第一に、テキスト前半部の「汽車」による越境を考えてみよう。物語の序盤、葉子は横浜行きの列車に乗るが、その中で嘗ての夫木部と再会する。二人は言葉を交わさないものの、木部の執拗な眼差しに葉子は我慢ならず、デッキへ逃げる。

「汽車は目まぐるしい程の快速力で走つてゐた。葉子の心は唯混沌と暗く固まつた物の周りを飽きる事もなく幾度も左から右に、右から左に廻つてゐた。かうして葉子に取つては永い時間が過ぎ去つたと思はれる頃、突然頭の中を引掻きまはすやうな激しい音を立て、汽車は六郷川の鉄橋を渡り始めた。葉子は思はずぎよつとして夢からさめたやうに前を見ると、釣橋の鉄材が蛛手になつて上を下へと飛び跳るので、葉子は思はずデッキのパネルに身を退いて、両袖で顔を押へて物を念じるやうにした」(『或る女』第三章)

「幾度も左から右に、右から左に廻つてゐた」という心象と越境場面の「鉄材が蛛手になつて上を下へと飛び跳る」記述は対比的である。葉子の閉ざされた内省は外部から来る轟音と垂直運動によって破られる。葉子の内面と関わりなく、強襲する強烈な感覚はその立位置が新しい場所へと越え出たということを葉子に教えるのだ。六郷川(多摩川の河口付近)は東京都と神奈川県の間となる川であるが、この川の越境以後葉子は海の越境(日本からアメリカへ)に臨むこととなる。横浜へ向かうこの越境は船によって運ばれる日本・アメリカ間の越境を予告している。では、この越境は葉子に何を導いたのか。それは木部弧との新たな出会いである。具体的にいえば葉子は列車内にいる木部の眼差しから逃れて来たのに、以降の瞑想の中で「木部の顔と殊にその輝く小さな両眼とがまざと想像」される。そうして更にその幻は「段々とその鼻の下から鬚が消え失せて行つて、輝く眸の色は優しい肉感的な温みを持ち出し」「稍荒れ始めた三十男の皮膚の津は、神経的な青年の青白い膚の色」となる。つまり「どん若やいで行つた」のだ。そうして葉子は列車を出る本物の木部を見るとその心臓は「はつと処女の血を盛つたやうに時め」いたのだった。逆行する時間がここにある。葉子は恰も木部と幸福な時を過ごしていた過去へタイムスリップしたかのように改めて彼と出会う。そこでは不和や出産や離婚といった拭いぬ過去は括弧がけされ、新しい二人のロマンスが再生する機会が準備される。コミュニケーションのユートピアは木部でも可能だったかもしれない、その可能性を葉子は改めて直面するのだ。

第二例を見てみよう。それは後編の第三十七章であり、そこで葉子と倉地は鎌倉を訪れ、光明寺を目指して由比ガ浜の海岸線を歩く。そして「稲瀬川を渡る時、倉地は、横浜埠頭で葉子にまつはる若者にしたやうに、葉子の upper body を右手に軽々とかゝへて、苦もなく細い流を跳り越」す。「搬ばれるものとしての葉子」像がここにも表れているが、葉子はここでも越境を経験する。しかも倉地による越境企図はこれで二度目であり、前例に対をなす形で、アメリカ行きを余韻のようにして反響している。では、ここでの越境の効果はどのようなものだったろうか。その答えは前例と同じものとなる。つまり、「稲瀬川」を越えても尚二人の前には「滑川の川口」が行く手を拒むかのようにして流れ、「二人は川幅の狭さうな所を尋ねて段々上流の方に流れに沿うて上つて行つた」。過去への回帰とは不可逆的に流れる時間に対する一種の逆行であり、川の流れに逆らつて進む葉子は知らず知らずの内にその不可能な軌道を辿っている。勿論、その軌道が導くのは「どうも不思議な心持ちで」「行く気になれなかつた」「乱橋の方」であり、その橋の下で「葉子をぢつと見つめてゐ」た木部弧その人だ。「又会ふ事があるだらうか」(第三章)と詠嘆していた葉子は奇しくも木部とこの章で又も再会するのだ。

葉子と木部の出会いは読者に既視感を与える。しかし、その二つの再会は最早同じ状況にあるものとはいえない。何故なら、第一の再会に於いて葉子には横浜へ行かねばならない半強制性があったものの、特定のパートナーのいないその現在時に於いて、逆行する時間の中で過去を水に流して再び木部とのロマン

スをやり返すことができたかもしれない。しかし、第二の再会に於いて葉子は木村との婚約を破棄し、又倉地とのロマンスを既に選択している。その既決性は決して覆されず、「何とかして一度私に会って下さいませんか？」という葉子の申し出を木部は婉曲に断る。一度チャンスを逃した葉子に二度目は与えられないのだ。否、厳密に言えば一度目の再会に於いても木部が葉子とやり直す気があるかどうかは定かではなく、逆行する時間は葉子の内なる想像に於いてでしか可能とならない。畢竟越境は過去回帰の幻と戯れながら尚過去が回収できないという反ユートピアへと葉子を導くのだ。

木部弧という男は葉子にとっての過去を象徴的に担っている。それ故、『或る女』の始まりと終末近くで彼が登場することは特筆に価する。葉子は木部と別れ、新しい生活を求める。その結果、葉子は木村を退け倉地と共に日本へ還って来る。その過程では木部との関係で生まれた定子さえ放擲せねばならなかった。そして倉地がスパイをしていることが発覚して新生活に暗雲が立ち込め始めた頃、葉子はコキョウ（故郷）へ帰るようにコキョウ（弧）と再会する。この二つの再会が前編後編に跨って『或る女』というテキストに緊張を与える。或る意味で木部も又痕跡だ。一度目の再会時にその痕跡が指示するのは木部との婚約に至る迄と婚約破棄から現在時に至る過去の道程であり、そこに不明瞭さはない。葉子は越境的にその失われた過去を辿り直すことで出会ったばかりの若き木部を再現前化させる。つまり現在時に於いて過去を回収する（過去へ回帰する）ことに想像的に成功するのだ。しかし、越境が齎すのは回収可能な過去へとは限らず、寧ろその限界、その不可能性へこそ越境者を導く。二度目の再会時に於いて木部の顔は「一寸見忘れる位年がいつて」おり「様子からも落魄といふやうな一種の気分が漂」っている。何故一年も経過していないのに、木部がそのような姿に成り変わり果てたのか、その経緯を葉子は知らない。木部は木部の時間を生き、葉子は葉子の（倉地と共に生きる）時間を生きた。そこに時間の共約性は構成されず、現前的に生きなかった過去は再現前化することはできない。しかしにも関わらず、その過去（木部）は葉子と決して無関係とはいえずそれに纏わる出来事を撤回できる訳でもない。木部は定子の父であり木部がどんなに葉子や定子とかけ隔たった時間を過ごしていたとしてもその過去は葉子の背後をついて回る、恰も倉地とのスキャンダルを報じた新聞記事を皮肉にも前夫の「木部弧と云ふ名が眼に着いた」から発見したように（第二十二章）葉子にとっての木部の名を抹消することはできない。痕跡としての木部が例えば葉子の「捨石」と同様の位置を占めていることがよく分かるが、二度の越境はどちらとも葉子の過去の遺物となった木部へ導くものの、両者は対比的であり、一方は嘗ての男との再会を提供し（想像的に）時間を逆行するが、もう一方はその不可能性を告発し、嘗ての男は全くの他人のように葉子にとって不明瞭で謎めいた姿形で現れ、しかし尚も葉子の過去を象徴的に担う。過去は回収できないが、だからといって切断することもできないのだ。

過誤は取り返しのつかないものとしてのみある。葉子が自身に巢食う「間違い」を憎む時、その意識が過去へ遡行することは容易に理解できる。そしてその一端を象徴的に担っていたのが木部弧という男であった。しかし、その一方葉子のような過去に反抗する傾向があることも又事実だ。我々はテキストの中から二つの越境場面を見たが、これを確認するのにもう二つの越境を考察しよう。ここでは架橋者の位置が問題になり、一つはもう既に何度か言及した日本・アメリカ間の越境を指す。しかし、この越境は厳密に言えば失敗している。（日本からアメリカへ橋渡りする）架橋者倉地は葉子をシアトルへ送り届けずに、日本へ帰ってきてしまうからだ。失敗する越境、それは「外国」を待ち望んでいた葉子に失望を齎す筈だった。しかし、そこには本編中、発揮されることの少なかった葉子の意志が反映されている。つまり、木村との婚約は葉子にとって渋々のことであり、「どうしても木村と一緒にするのはいや」（第十五章）なのが葉子の本心であって、してみれば運命的に出会う、自分と同じく「間違」った倉地と共に日本へ帰ることは葉子にとって失敗ではなく寧ろ予定されていた未来からうまく逃亡することのできる救済であった筈だ。そしてその逃亡は葉子にとって過去を忘却して現在の緊張への集中にのみ生きることを容易に意味する。

「木村がどうした。米国がどうした。養つて行かなければならない妹や定子がどうした。今まで葉子を襲ひ

続けてみた不安はどうした。人に犯されまいと身構へてみたその自尊心はどうした。そんなものは木葉微塵に無くなつてしまつてみた。倉地を得たらばどんな事でもする。どんな屈辱でも蜜と思はう。倉地を自分独りに得さへすれば……。今まで知らなかつた、捕虜の受くる蜜より甘い屈辱！

〔中略〕葉子はソファを牝鹿のやうに立上つて、過去と未来とを絶ち切つた現在刹那の眩むばかりな変身に打ふるひながら微笑んだ(『或る女』第十六章)

葉子にとって倉地というパートナーを得さえすれば、様々な過去の付随要件や想像された未来図を放棄しても構わない、或いは放棄することができると思じている。それは葉子にとって「変身」であり、石丸晶子が「時間なき世界」と呼んだに相応しく「過去と未来とを絶ち切」り一から始まる全く新しい生活が始動するように見える。更に、後編ではこの過去の切断願望は先鋭化する。

「自分の心で何もかも過去は一際焼き尽して見せる。木部もない、定子もない。まして木村もない。皆んな捨てる、皆な忘れる。その代り倉地にも過去といふ過去を悉皆忘れさせずにおくものか」(『或る女』第二十六章)

不可視の過去、確定不能な過去は直接的コミュニケーションを志向する者にとって障害にしかない。そしてその純化はパートナーにも科される。完全な相互理解は、透明な直接性の下に成立し、不透明な過去の存在は「倉地の中にすつかり融け込んだ自分を見出す」ような主客無分離の境地に差異を導き入れてしまうからだ。葉子はテキスト内でしばしば写真でしか知らない倉地の妻に嫉妬の念を抱いているが、その過去の存在と倉地とが無縁にならない限り、木部を捨て定子を捨て木村をも捨てつつある葉子のユートピアが瓦解してしまうことは言う迄もない。二現在の隙間なき一致、これが例えば「有頂天の歓楽」だった訳だが、しかし、葉子は重大な矛盾を犯している。というのも、葉子が倉地を他の男性から特殊化したのは「自分と同様に間違つて境遇づけられて生まれて来た人間」だからであり、それはありえただろう(葉子が「女王」になるような)現在と当の現在との違和(落差)から想像的に解釈される過誤であって、そこには葉子倉地を問わず過去から現在へという時間的な秩序を無視することはできない。「過去といふ過去を悉皆忘れさせずにおくものか」と葉子は思うが、では自身によって倉地という男性を特殊化した経緯、そして倉地に対して妻を裏切らせ自身を特殊化させようとした経緯はどのようにして正当化されるのだろうか。倉地の存在理由は葉子にとって、「自分と同様に間違つ」たからであり、その「間違ひ」が時間的秩序の中で成立するのだとすれば、過去の忘却は倉地が倉地であることの、他の男ではなく倉地を選んだということの根本原因を揺さぶってしまう。葉子の過誤撤回の試みは過誤の「同様」性の崩壊を導き入れてしまう。そうして、この必然性の危機は、同時に現在が他のようでもありえたのではないかという不確定で多数の可能性を開示してしまう。過去の忘却は逆説的にも他の現在への夢へと主体を導く。

他の現在への夢へと主体を導く、と書いたが、ここでも問題になるのが再会する木部弧である。橋の下で見つめる木部が登場する先に引用した場面の後、木部は二人を「田舟」で橋渡しすることを提案する。二度目の船による越境だ。しかし、今度の架橋者は嘗ての男木部弧であり、彼は現在への逃亡を果たそうとする葉子を攪乱するように両者の間に介入し、嘗て倉地が担った「絵島丸」での架橋行為を今度は自身の「田舟」で遂行する。

「三突きほどで他愛なく舟は向ふ岸に着いた。倉地が逸早く岸に飛び上つて、手を延ばして葉子を助けやうとした時、木部が葉子に手を貸してみたので、葉子はすぐにそれをんだ。思ひ切り力を籠めた為めか、木部の手が舟を漕いだ為めだつたか、兎に角二人の手は握り合はされたまゝ小刻みに烈しく震へた。

「やつ、どうも難有う」

倉地は葉子の上陸を助けてくれた木部にかう礼を云つた。

木部は舟から上らなかつた。而して鏝広の帽子を取つて、

「それぢやこれでお別れします」

と云つた」(『或る女』第三十七章)

「舟から上らな」いで「向ふ岸」へ架橋をする木部のこの態度は嘗て倉地が木村に対して取るべき筈の態度であったらう。葉子は「向ふ岸」への「上陸」を拒否して、倉地と共に日本へ還ってきてしまった。葉子の目の前で展開されるこの一連のやり取りは葉子が夢見たのとは別様の過去の可能性を、そしてその延長で齎される別様の現在の可能性を示唆的に表現している。具体的にいうならば、葉子が倉地を諦め、木村と共にアメリカで生活するという可能性を暗に示している。見ようによっては、この場面は或る意味で反復である。しかし反復される当の越境は嘗て一度として生起したことがなく、実際の越境(の失敗)の背面として想像的に設定される可能性としての反復である。この場面に直面した葉子はその夜、「何故私は木部を捨て木村を苦しめなければならないのだらう」と自身の生を反省し、乳母宛の手紙に同封した木部宛の手紙に「定子はあなたの子です」という告白を書き、更に自分の亡き後に定子の養育を依頼する旨をしたため(書くことに対して消極的だった葉子が例外的に自分の真心を手紙に託すが、その一方で居所の知らない木部へコミットする方法はこれ以外になく、この手紙も最終的に木部の下に届くかどうかは定かではない)。葉子の現在時は忘却された筈の過去の突然の登場によって大きく揺らぎ、反省を促す。彼の架橋行為は過去の、又現在の別様の可能性を示唆的に表現しながら、しかもそれを最早償い得ないものとして葉子に反復的に突きつけるのだ。

「絵島丸の中で味ひ尽し嘗め尽した歡樂と陶醉との限りは、始めて世に生れ出た生甲斐をしみと感じた誇りがな暫らくは今の自分と結び付けていゝ過去の一つなのだらうか.....〔中略〕あんな世界がこんな世界に変つてしまった。さうだ貞世が生死の境に徨つてゐるのはまちがひやうのない事実だ。自分の健康が衰へ果てたのも間違ひのない出来事だ」(『或る女』第四十五章)

病に身体を侵犯され、身動きがとれなくなり、倉地にも愛想をつかされたテクスト後半部の葉子は終に「間違ひない出来事」を発見する。己の生の始めから「間違つて」しまい、その背面に位置する無謬を想像的に探求し続けた女は終に発見するのだ。しかし、その「間違ひない出来事」は過去がどのようなものであったにしろ、そして別の可能性がどのように開かれていたようにみえたとしても、現在は事実としてあり、それはやり直すことも撤回することもできず、己自身が受動的に甘受せねばならない「こんな世界」なのである。

度重なる越境は畢竟葉子を「こんな世界」へと導いた。「こんな世界」とは現在が端的に現在としてある世界であり、そこには過去がどのようなものであれ(不確定であったにしても)その不当を訴えることはできないという極限的な世界認識が存在する。葉子は一方では痕跡読取によって過去を確定化しようと試み、又一方では過去を確定不確定を問わない儘忘却しようとする。その目的は同一である訳だが(つまり相互現前性の回復にあるのだが)それと対応するようにどちらも葉子に齎す結果は同じであるといえる。前者を選べば葉子は読取不能に陥り、過去の様々な可能性に翻弄され、現在の必然性を危うくさせる。しかしだからといって、忘却(過去切断)を無理矢理に徹底してしまえば、そこでも又現時は危機を迎え、別様にありえた現在の可能性を事後的に与えてその必然性を喪失させる。しかし実は必然性に関する危機は本当の危機とはいえない。何故なら想像的に可能性を思考することも又過去を切断することも、現時の定立を前提的な条件としているからだ。寧ろその危機の問題性は対照的に条件となっているその現時の単一性を浮き彫りにしてしまうという処にある。事実、現在に必然性があるうがなかりうが、葉子の現在は「貞世が生死の境に徨つてゐる」ことや「自分の健康が衰へ果てた」ことといった想像介入の余地のない燃え尽き果てた灰色の単一の現在としてある。主体が現前的に経験した過去やそれ以上に経験に先立つ過去、そして他の様にもありえたという可能性は、全てをひっくり返して、円錐形の一点としての現在へと収束される。様々な可能性等は寧ろその地点から出立する回顧的な視野の下成立する。しかし逆に見てみればその一点に宿ってしまうのは、己の過去や時代の状況に責任を転嫁できない、ルサンチマン(怨恨)を最早抱

けない、投げ出されて尚代替できない確かな実存の重さである。葉子の過去は「間違つて」しまったかもしれない、しかしだからといって、その現在は「間違ひない」。間違いようのない、間違える可能性が皆無な実存的な現在なのだ。要するに、度重なる越境は葉子を「どこか別」の場所へ導くようにみえるが、自分自身(その実存)から離脱できる訳ではなく、最終的にそれは夢想的なユートピアや彼方など何処にもないのだという袋小路にこそ葉子を導いたのだ。

ここ迄きて我々は倫理主体としての葉子像を理解できる。前述したように葉子には「罪」が誰にあるのかわからない。或いは「こんな世界」に何故なったのかわからない。しかし、その一方分かることは依然としてあり、それはこの現在が別様にあることはありえないという切迫した実存的な現在に他ならない。手術を受ける前日の第四十七章と受けた後の最終章で葉子は嘗ての師内田のことを思い懐かしさを覚える。彼は嘗て葉子が木部弧と婚約した際激昂し「罪だぞ……恐ろしい罪だぞ」(第六章)と言った人物であった。しかし、繰り返しになるが、葉子には「罪」が自分に帰属するのかどうか分かっていないし、加えて彼女の軌跡を追っていった読者も又それを判断することはできないだろう。彼女の言う通り、その生れた時代や場所が違えば、葉子を受け入れてくれる環境は十分にあり得るものであるからだ。しかしそれでも彼女には「後悔」があり「生きている中にそれを償つておかなければならない」と覚悟する。そこにあるのは現在が事後的にみて他の可能性に開かれていたようにみえたとしても、この現在は変えようもなく確かにあるのだという切迫であり、それを背負い応答しなければ生きていることそのものの意味が無為に帰してしまうという責任感である。誤謬を過去に認め、現在に無謬を求めた葉子は実際に「間違ひない出来事」を手に入れる。しかしその無謬は間違えてしまった歴史の間違いなさであり、その歴史の具体的な内実如何に関わりなく、今の現在は頑としてあるのだ、という世界認識である。木部や木村とのロマンスも男性から独立した女権的な生活もありえたかもしれない。しかし最早そんなことをいってはられない。それはルサンチマンであり、無謬なる「間違ひなき出来事」を手に入れたからには現在を掛け替えない、交換不能な現実として肯定する他に道はないのである。

最終章、葉子は内田への呼び寄せを古藤に依頼して「誰れにととも何にともなく息気を引取る前に内田の来るのを祈つた」。全編を通して、移動に移動を、越境に越境を重ね、動き続けてきた葉子は、最早自らの意志で動いて内田を訪問することができず、代理人としての他人にその希望を託すしかない。葉子ができるのは到来するかどうか分からない不確定な内田を身体の苦痛に耐え忍びながら、ただただ待ち続けることだけだ。直接的なコミュニケーションを志向し、相互現前の関係に執着してきた主体は転回し、不在に耐え忍びながら祈る主体と化す。祈りは決して叶う確証がないのにも関わらず、尚願うことにその真価がある。それはいわば賭けのようなものであり、それが失敗してしまうかもしれない現実を十分考慮に入れながら尚一方に信をおくことを意味する。その未決性は純粋な未来(未だ来ざるもの)であり、そこへ消しつつあるその身を託す葉子像は倉地との相互現前的な「歓楽」に身を託す葉子や痕跡の読取から過去の回収を試みる葉子とは最早違ふ。そこにあるのは、直接性を諦めながらも、尚も誤解を恐れずコミュニケーションを開始しようとする、勇気あるが不安定で傷つき易い主体であり、後悔と自責の中でそれでも過去への回帰や想像的な未来図の夢想といった別様の可能性に縋らず、現実を生き延びようとする意志である。ここに表現されているのは個性と時代が齟齬を起してしまった一人の女性の悲劇だけではなく、神の死後を生きる実存者が、救いなき遺棄の中で尚も生き延びようとする真摯な祈りなのである。「痛い……痛い」という誰に聞き届けられるともない葉子の最後の呻きは、時代を超えて我々の下へと反響するのだ。

- (註一) 石丸晶子『『或る女』論 「醜」と「邪」の底に何があったか』、『有島武郎 作家作品研究』、明治書院、平一五・四。
- (註二) 内田満「有島武郎の時間構造 小説を支える「時間」の視座」、『有島武郎 虚構と実像』、有精堂、平八・五。
- (註三) 田辺健二「有島武郎の内部生命観 その時間意識との係わり」、『有島武郎試論』、溪水社、平三・一。
- (註四) 例えば、川上美那子(『『或る女』論のための序章』、『有島武郎と同時代文学』、審美社、平五・一二)や外尾登志美(『『或る女』の主題』、『有島武郎 「個性」から「社会」へ』、右文書院、平九・四)。
- (註五) 例えば本多秋五は古藤が葉子に「ほれていなかったとは絶対にいけない」と発言している(『座談会明治・大正文学史(4)』、柳田泉+勝本清一郎+猪野謙二編、岩波現代文庫、平一二・五)。このような観察者がテキスト中にいたとして、彼が「Y・K」の文字に邪推を加えたとしても不思議はない。
- (註六) 川上美那子『『或る女』について(2) 後篇世界の意味』、『有島武郎と同時代文学』。
- (註七) 相沢毅彦は葉子が新聞メディアに包囲されることを指摘して、その意識に「見えない抑圧」を植えつけるパノプティコン、監視=報道システムが成立しているのだとしている(『有島武郎の『或る女』と新聞スキャンダル 見えない抑圧について』 / 『有島武郎研究』、有島武郎研究会、平一五・三)。
- (註八) 山田俊治『『或る女』の方法と主題』 / 『有島武郎『或る女』を読む』収、青英舎、昭五五・十。
- (註九) 高橋世織「乗り物のなかの葉子 しぐさ の解読」 / 『有島武郎『或る女』を読む』収。

『或る女』の時間論
<http://p.booklog.jp/book/25310>

著者：荒木優太

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/arishima-takeo/profile>

発行所：ブックログのパブー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社 paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ
<http://p.booklog.jp/book/25310>

ブックログのパブー本棚へ入れる
<http://booklog.jp/puboo/book/25310>